

デスクトップ配備設定プログラム リファレンス

*Sun Java™ System Connector
for Microsoft Outlook*

Version 6.0

817-6727-10
2004 年 2 月

Copyright © 2004 Sun Microsystems, Inc., 4150 Network Circle, Santa Clara, California 95054, U.S.A. All rights reserved.

米国 Sun Microsystems, Inc. (以下、米国 Sun Microsystems 社とします) は、本製品に含まれるテクノロジーに関する知的所有権を保持しています。特に限定されることなく、これらの知的所有権は <http://www.sun.com/patents> に記載されている 1 つ以上の米国特許および米国およびその他の国における 1 つ以上の追加特許または特許出願中のものが含まれている場合があります。

このソフトウェアは米国 Sun Microsystems 社の機密情報と企業秘密を含んでいます。米国 Sun Microsystems 社の書面による許諾を受けることなく、このソフトウェアを使用、開示、複製することは禁じられています。

U.S. Government Rights - Commercial software. Government users are subject to the Sun Microsystems, Inc. standard license agreement and applicable provisions of the FAR and its supplements.

この配布には、第三者が開発したソフトウェアが含まれている可能性があります。

本製品の一部は、カリフォルニア大学からライセンスされている Berkeley BSD システムに基づいていることがあります。UNIX は、X/Open Company, Ltd. が独占的にライセンスしている米国およびその他の国における登録商標です。

Sun、Sun Microsystems、Sun のロゴマーク、Sun Java System Connector for Microsoft Outlook、Java、Solaris、JDK、Java Naming and Directory Interface、JavaMail、JavaHelp、J2SE、iPlanet、Duke のロゴマーク、Java Coffee Cup のロゴ、Solaris のロゴ、SunTone 認定ロゴマークおよび Sun ONE のロゴマークは、米国およびその他の国における米国 Sun Microsystems 社の商標もしくは登録商標です。

すべての SPARC 商標は、米国 SPARC International, Inc. のライセンスを受けて使用している同社の米国およびその他の国における商標または登録商標です。SPARC 商標が付いた製品は、米国 Sun Microsystems 社が開発したアーキテクチャに基づくものです。

Legato および Legato のロゴマークは Legato Systems, Inc. の登録商標であり、Legato NetWorker は同社の商標または登録商標です。Netscape Communications Corp のロゴマークは Netscape Communications Corporation の商標または登録商標です。

OPEN LOOK および Sun Graphical User Interface は、米国 Sun Microsystems 社が自社のユーザーおよびライセンス実施権者向けに開発しました。米国 Sun Microsystems 社は、コンピュータ産業用のビジュアルまたはグラフィカルユーザーインターフェースの概念の研究開発における米国 Xerox 社の先駆者としての成果を認めるものです。米国 Sun Microsystems 社は米国 Xerox 社から Xerox Graphical User Interface の非独占的ライセンスを取得しており、このライセンスは米国 Sun Microsystems 社のライセンス実施権者にも適用されます。

本マニュアルに情報が記載されている製品は、米国の輸出規制に関する法規の適用および管理下にあり、また、米国以外の国の輸出および輸入規制に関する法規の制限を受ける場合があります。核、ミサイル、生物化学兵器もしくは原子力船に関連した使用またはかかる使用者への提供は、直接的にも間接的にも、禁止されています。このソフトウェアを、米国の輸出禁止国へ輸出または再輸出すること、および米国輸出制限対象リスト (輸出が禁止されている個人リスト、特別に指定された国籍者リストを含む) に指定された、法人、または団体に輸出または再輸出することは一切禁止されています。

本書は、「現状のまま」をベースとして提供され、商品性、特定目的への適合性または第三者の権利の非侵害の黙示の保証を含みそれに限定されない、明示的であるか黙示的であるかを問わない、なんらの保証も行われぬものとします。

目次

図目次	5
このマニュアルについて	7
第1章 はじめに	13
概要	13
管理者のプロセスの概要	14
管理者のソフトウェアのインストール	15
第2章 エンドユーザーのインストールパッケージの作成	19
「プロセス」タブ	21
ユーザーモード	22
この設定に含めるプロセス	22
ログファイルの設定	24
ステータスファイルの設定	25
「メモ」(オプション)	25
「ユーザープロファイル」タブ	26
ユーザープロファイルの設定	27
設定時にプロファイルのユーザーパスワードを保存するためのオプション	28
個人用フォルダ (.pst) ファイルの設定	29
「サーバー」タブ	30
設定	31
「IMAP」タブ	31
設定	32
オプション	32
「SMTP」タブ	33
オプション	33
「LDAP」タブ	34

設定	34
「カレンダー」タブ	35
設定	35
「単一のユーザー」タブ	36
設定	37
第3章 特殊な環境に関するアプリケーションノート	39
「プッシュ」方式の配備 (エンドユーザーがインストール特権を持たない場合)	39
手順 1: 必要な共有フォルダの準備	40
手順 2: 必要なソフトウェアをインストールするための Connector for Microsoft Outlook インストールパッケージの準備	42
手順 3: SMS インストールパッケージによる最初の Sun Java System インストール パッケージのユーザーデスクトップへのプッシュ	42
手順 4: 既存の Outlook プロファイルおよびデータファイルを変換する 2 番目の Sun Java System インストールパッケージの準備	46
手順 5: SMS インストールパッケージによる 2 番目の Sun Java System インストール パッケージのユーザーデスクトップへのプッシュ	46
ユーザーのインストールパッケージ用のコマンド行スイッチ	47
Exchange から Sun Java System へのターミナルサービスユーザーの移行	48
手順 1: サーバーの準備	48
手順 2: 適切なデスクトップインストールパッケージの作成	49
手順 3: ユーザーのデスクトップの更新	49
ユーザーのデフォルトの電子メールクライアントとして Microsoft Outlook を指定する方法	49
ユーザーのワークステーションから Sun ONE Sync プラグラムを削除する方法	50
ユーザーの移行の取り消し (破棄)	51
ユーザーが Outlook から LDAP サービスを削除した場合の復元	52
索引	53

目次

図 1-1	InstallShield ウィザードの「Welcome」画面	15
図 1-2	InstallShield ウィザード：カスタム情報	16
図 2-1	配備設定プログラム：設定ウィンドウ	20
図 2-2	配備設定プログラム：「プロセス」タブ	21
図 2-3	配備設定プログラム：「ユーザープロファイル」タブ	26
図 2-4	配備設定プログラム：「サーバー」タブ	30
図 2-5	配備設定プログラム：「IMAP」タブ	31
図 2-6	配備設定プログラム：「SMTP」タブ	33
図 2-7	配備設定プログラム：「LDAP」タブ	34
図 2-8	配備設定プログラム：「カレンダー」タブ	35
図 2-9	配備設定プログラム：「単一のユーザー」タブ	36
図 3-1	LOGS 共有フォルダのアクセス権の設定 (左) とプロパティ (右)	41
図 3-2	SMS Distribute Software ウィザード：Package Identification	43
図 3-3	SMS Distribute Software ウィザード：「Source Directory」画面	44
図 3-4	ユーザーの「Advertised Programs Monitor」	45
図 3-5	ユーザーの「Countdown」ダイアログボックス	45

このマニュアルについて

このマニュアルでは、Sun Java™ System Connector for Microsoft Outlook の配備設定プログラムについて説明します。この章では、次のトピックについて説明します。

- [対象読者](#)
- [必要な知識](#)
- [このマニュアルの構成](#)
- [マニュアルの表記上の規則](#)
- [関連マニュアル](#)
- [オンラインマニュアル](#)

対象読者

このマニュアルは、それぞれの現場で Sun Java System Connector for Microsoft Outlook の管理と配備を担当するユーザーを対象としています。

必要な知識

このマニュアルでは、読者が Connector for Microsoft Outlook ソフトウェアの管理および配備担当者であり、次の一般的な知識を習得していると想定しています。

- インターネットおよび WWW
- Messaging Server プロトコルおよび Calendar Server プロトコル
- 次のプラットフォームでのシステム管理とネットワークング
 - Microsoft Windows 2000
 - Microsoft Windows XP
- Microsoft Outlook
- 一般的な配備アーキテクチャ

このマニュアルの構成

このリファレンスマニュアルには、この序文に続いて、次の 3 つの章があります。

- **第 1 章「はじめに」** - Sun Java System Connector ソフトウェアの設計目的、全体的な移行でのさまざまな状況における一般的な使用方法、管理者が最初に行う作業のほか、管理者のソフトウェアを管理者自身のコンピュータにインストールする手順について簡単に説明します。
- **第 2 章「エンドユーザーのインストールパッケージの作成」** - この章では、配備設定プログラムを使用して、Outlook のエンドユーザー向けにカスタマイズしたインストールパッケージを作成する方法について説明します。このパッケージは、ユーザーの環境に応じて、必要なソフトウェアをインストールしたり、新しい Connector for Microsoft Outlook で使用するために、既存の Outlook と Exchange のデータファイルを変換したり、またはその両方を行えるように設定できます。
- **第 3 章「特殊な環境に関するアプリケーションノート」** - この章では、特殊な環境またはネットワーク構成で、Sun Java System Connector for Microsoft Outlook を配備する方法について説明します。
 - 「プッシュ」方式の配備 (エンドユーザーがインストール特権を持たない場合): エンドユーザーのデスクトップにソフトウェアをインストールするにはアクセス特権が必要になりますが、これは多くの場合、ほとんどのエンドユーザーには許可されていません。このような場合、ほとんどの組織では、システム管理者からユーザーのデスクトップへソフトウェアを配布する「プッシュ」方式を採用しています。これにより、ユーザーのアクセス特権の必要性が回避され

ます。エンドユーザーがソフトウェアをインストールできないように「ロックダウン」した Windows 環境で、ネットワークが使用されている場合は、それぞれのデスクトップに何度もアクセスせずに済むように、このような自動設定管理を使用することをお勧めします。

- **ユーザーのインストールパッケージ用のコマンド行スイッチ** : ユーザーのインストールパッケージは、必要なユーザーパスワードを変換プログラムに実行時に渡すスイッチを使用して、コマンド行から実行できます。したがって、コマンド行スイッチを使用して、SMS スクリプトからインストールパッケージを実行できます。これにより、ユーザーの操作を一切必要としない、まさに無人のインストールおよび設定が可能になります。
- **Exchange から Sun Java System へのターミナルサービスユーザーの移行** : この Sun Java System Connector 管理者ツールは、Windows ターミナルサービスの既存の Outlook ユーザーを、Exchange から Sun Java System サーバーへ移行する場合にも使用できます。
- **ユーザーのデフォルトの電子メールクライアントとして Microsoft Outlook を指定する方法** : Sun Java System Connector ソフトウェアのインストールでは、Outlook が、全ユーザーのデフォルトの電子メールクライアントとして設定されている必要があります。ユーザーが Outlook を自身のデフォルトのクライアントに設定していない場合は、そのユーザー (または管理者) は、ここでの指示に従って、Outlook をデフォルトのクライアントに設定し直す必要があります。
- **ユーザーのワークステーションから Sun ONE Sync プログラムを削除する方法** : Sun Java System Connector ソフトウェアと Sun ONE Sync プログラムを同じデスクトップ上に共存させることはできません。Sun ONE Sync プログラムがユーザーのデスクトップにインストールされている場合は、そのユーザー (または管理者) が、ここでの指示に従って削除する必要があります。
- **ユーザーの移行の取り消し (破棄)** : 新しい Sun Java System へのユーザーの接続を中止し、そのユーザーのメールボックスを元の Exchange サーバーのサービスに復元する方法を説明します。
- **ユーザーが Outlook から LDAP サービスを削除した場合の復元** : LDAP サービスをユーザーのワークステーションに復元する方法を説明します。

マニュアルの表記上の規則

このマニュアルでは、ファイルとディレクトリパスは、Windows 形式で表記されます (ディレクトリまたはフォルダ名を円マークで区分)。Sun Java System の他のマニュアルを参照する場合は、UNIX の表記規則でファイルおよびディレクトリパスが表されています (ディレクトリをスラッシュで区分)。

- モノスペースフォントは、コンピュータの画面に表示されるテキストまたは入力するテキストに使用されます。また、ファイル名、識別名、関数、および例にも使用されます。
- ボールドモノスペースフォントは、コード例の中で入力するテキストを表します。
- イタリック体フォントは、インストールに特有の情報を使用して入力するテキストを表します (変数など)。これはサーバーのパスと名前に使用されます。

たとえばパス参照は、次の形式で記述されます。

```
ISTORE $x$ .LOG
```

この場合、 x は曜日を示す数値になります。

イタリック体フォントは、コマンド行ユーティリティの使用例内の変数にも使用されます。たとえば、インストールパッケージは、次のコマンド行ユーティリティをサポートしています。

```
/USERNAME= $xxx$ 
```

この例では、関連するコマンドの引数がイタリック体フォントです。 xxx は、サーバーの UserID を示します。

- 角カッコ [] は、オプションパラメータを囲むために使用されます。たとえば、`setup` コマンドが次のように記述されている場合があります。

```
installer [options] [arguments]
```

次のように `installer` コマンドを単独で実行して、Messaging Server のインストールを開始することができます。

```
setup
```

ただし、[options] と [arguments] は、`setup` コマンドに追加できるオプションのパラメータがあることを示しています。たとえば、次のように `-k` オプションを付けて `setup` コマンドを使用すると、インストールキャッシュを保持できます。

```
setup -k
```

関連マニュアル

配備設定プログラムの詳細と、Sun Java System Connector for Microsoft Outlook を配備する際のシステム管理者の役割の詳細については、次のマニュアルを参照してください。

- 『Sun Java System Connector for Microsoft Outlook デスクトップ配備管理者ガイド』: 『デスクトップ配備管理者ガイド』では、配備プロセスのより広範な概要を示し、システム管理者が実際の配備の前に考慮すべき、いくつかの重要なオプションとハイレベルな計画オプションについて説明します。ユーザーインストールパッケージを準備するときには、ユーザーのデスクトップに新しいソフトウェアを配布、インストール、および設定する方法を多くの選択肢から決定できます。選択肢の中には配備上必須なものもありますが、組織、ネットワーク、ユーザーについての個人的な知識に基づいた判断が必要なものもあります。『デスクトップ配備管理者ガイド』は、各オプションの重要性と影響を理解して、このようなすべての選択肢に事前に対処できるように記述されています。

配備設定プログラムを使用してユーザーのインストールパッケージの準備を開始する前に、『デスクトップ配備管理者ガイド』を一読することを強くお勧めします。

- **オンラインヘルプ**: オンラインのコンテキストヘルプファイルは、配備設定プログラムに付属しています。ソフトウェアのどの画面またはタブからでも、「ヘルプ」ボタンをクリックするか、F1 キーを押すだけで、「ヘルプ」ウィンドウが開き、表示されている画面またはタブパネルに関連する情報が表示されます。

Sun Java System Connector for Microsoft Outlook に関するマニュアルは、次の URL にあります。

<http://docs.sun.com/db/prod/entsys?l=ja>

オンラインマニュアル

PDF および HTML 形式の『Sun Java System Connector for Microsoft Outlook デスクトップ配備設定プログラムリファレンス』を、オンラインで閲覧できます。このマニュアルは、次の URL にあります。

<http://docs.sun.com/db/prod/entsys?l=ja>

はじめに

概要

組織で、Sun Java System Connector for Microsoft Outlook を使用して、ユーザーが Sun Java System サーバーに接続しながら、電子メールおよびカレンダークライアントとして Microsoft Outlook を使用できるようにします。Outlook と Sun Java System サーバー間で継続的な通信を円滑に行うために、このソフトウェアのインストールと設定は、それぞれのユーザーのデスクトップで行う必要があります。Connector for Microsoft Outlook ソフトウェアは、セットアップウィザードによって 1 度に 1 つのデスクトップにインストールされます。このウィザードは、既存の Outlook データファイルを、新しいソフトウェアで読み込みんで使用できる形式に変換することもできます。

管理者による配備関連作業と、ユーザーによる新しいソフトウェアの実際のインストールおよび設定作業を単純化するために、配備設定プログラムが用意されています。管理者は、このツールを使用して、設定パラメータをあらかじめ設定し、ソフトウェアのエンドユーザー向けインストールパッケージをカスタマイズできます。これにより、ユーザーのプロセスの単純化と効率化を図り、特定のユーザーまたはユーザーグループにとって必要または望ましいと考えられるすべての設定を行うことができます。配備設定プログラムでは、この事前設定した設定パラメータを、.ini テキストファイルに保存し、この .ini ファイルとインストールプログラム (セットアップウィザード) をエンドユーザー用に 1 つにまとめます。エンドユーザーがパッケージを起動すると、セットアップウィザードは、.ini ファイルを読み込んで、管理者の指定に従って、ユーザーのデスクトップに Connector ソフトウェアをインストールおよび設定します。

システム管理者は、個々のユーザーごと、またはエンドユーザーグループごとに、別々のインストールパッケージを作成して、たとえば、営業部のユーザーと技術部のユーザーに対して異なる設定を実施したり、あるユーザーグループには設定オプションを与え、他のグループには固定パラメータを設定する (選択肢を排除する) こともできます。

管理者のプロセスの概要

一般的な配備事例では、管理者は次の4つの主要作業を行って、Sun Java System Connector for Microsoft Outlook を配備します。

1. **Sun Java System Connector for Microsoft Outlook ソフトウェアをインストールします。** Sun の管理ソフトウェアを使用してエンドユーザーのインストールパッケージを作成するには、言うまでもなく、管理者のコンピュータにこのソフトウェアが事前にインストールされている必要があります。インストール手順は、この第1章の最後の節で説明します。
2. **総合的な配備計画を準備します。** 計画と見通しは、円滑な配備に欠かせません。総合的な配備計画を作成するプロセスは、組織の移行作業に影響があると予想されるすべての要因を検討し調整する大切な作業です。このリファレンスマニュアルに同梱の『デスクトップ配備管理者ガイド』では、重要な移行コンセプト、必要条件、有利な選択について説明し、移行の指針となる配備計画の作成方法を記載しています。したがって、すべての管理者は『デスクトップ配備管理者ガイド』を一読し、総合的な配備計画を準備する必要があります。
3. **エンドユーザーのインストールパッケージを準備します。** 第2章「エンドユーザーのインストールパッケージの作成」では、配備設定プログラムを使用して、Outlook エンドユーザーのインストールパッケージをカスタマイズする方法について説明します。このパッケージは、ユーザーの環境に応じて、必要なソフトウェアをユーザーのデスクトップにインストールしたり、ユーザーの既存の Outlook と Exchange データファイルを新しいソフトウェアで使用できるように変換したり、またはその両方を行うように設定できます。
4. **各エンドユーザーのインストールパッケージを配備します。** ユーザーのインストールパッケージを作成し終わったら、このパッケージの入手先と使用方法をユーザーに知らせる必要があります。多くの場合、管理者は、インストールパッケージとそれに関連する『デスクトップインストールガイド』を共有フォルダにコピーして、インストールパッケージとマニュアルへのリンクを電子メールでユーザーに通知するだけです。

このプロセスの概要の**手順1**と**手順2**は、独自の構成や設定にかかわらず、出発点となります。ユーザーまたはユーザーグループごとに異なるインストールパッケージを必要とする移行計画の場合は、すべてのユーザーの移行が終了するまで、それぞれのパッケージごとに、**手順3**と**手順4**を繰り返すだけです。

配備元と配備先のネットワーク構成、組織の管理構造、ユーザーがデスクトップソフトウェアのインストールおよび設定プロセスに関わる度合いの認識に応じて、配備プロセスの進行は異なります。さらに、ネットワーク構成または設定によっては、上記の標準的な事例に何らかの変更を加える必要が生じることもあります。第3章「特殊な環境でに関するアプリケーションノート」には、さまざまな状況の中で最も一般的な状況に関するアプリケーションノートを記載しています。

管理者のソフトウェアのインストール

最新バージョンの Sun Java System Connector for Microsoft Outlook 管理者用ソフトウェアが、コンピュータにまだインストールされていない場合は、エンドユーザーのインストールパッケージを作成する前に、これをインストールする必要があります。

1. コンピュータにダウンロードまたはコピーした、Sun Java System Connector for Microsoft Outlook のセットアップファイル、Setup.exe を探します。ファイル名をダブルクリックしてプログラムを起動します。

図 1-1 に示すように、InstallShield ウィザードの開始画面が表示されたら、「Next」ボタンをクリックして続行します。

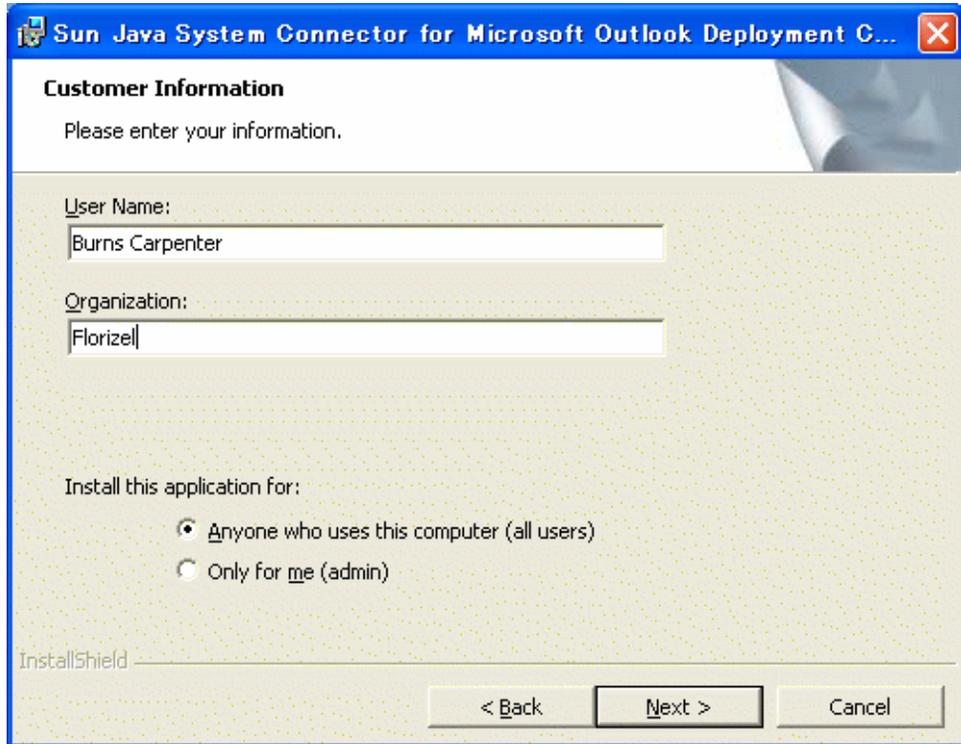
図 1-1 InstallShield ウィザードの「Welcome」画面



2. 「Next」ボタンをクリックします。

次に InstallShield ウィザードは、図 1-2 に示すように、カスタマ情報の入力を読めます。

図 1-2 InstallShield ウィザード: カスタマ情報



3. 「**User Name**」と「**Organization**」を入力し、Connector for Microsoft Outlook ソフトウェアを、このコンピュータのすべてのユーザーが利用できるようにするか、「**User Name**」のユーザーだけが利用できるようにするかを選択します。「**Next**」をクリックします。

次に InstallShield ウィザードは、「**Complete**」と「**Custom**」のどちらのインストールを実行するかを尋ねます。

4. 「**Complete**」のインストールオプションを選択し、「**Next**」をクリックします。

次に InstallShield ウィザードは、実際のインストールを開始できることを通知し、「**Next**」をクリックして開始するよう指示します。

5. 「**Next**」ボタンをクリックして、インストールが進行し完了するまで待ちます(この間、進行状況メーターがウィンドウに表示される)。

InstallShield ウィザードは、インストール処理が終了したことを通知し、「**Finish**」ボタンをクリックするように指示します。

6. 「Finish」をクリックします。

InstallShield ウィザードが終了すると、ブラウザウィンドウが開き、Sun Web サイトが表示されます。このサイトから、PDF および HTML ファイルのマニュアルをダウンロードできます。

これで、Connector for Microsoft Outlook 管理者用ソフトウェア (ファイル名 Admin.exe) が、次の場所にインストールされました。

C:\Program Files\Sun\Deployment Configuration Program\

Admin.exe プログラム用の新しいショートカットアイコンが、デスクトップに表示されます。

エンドユーザーのインストールパッケージの作成

最新バージョンの管理者用ソフトウェアが、コンピュータにまだインストールされていない場合は、第1章の「管理者のソフトウェアのインストール」を参照してください。管理者用ソフトウェアは、配備設定プログラムを実行する前に、コンピュータに正しくインストールされている必要があります。

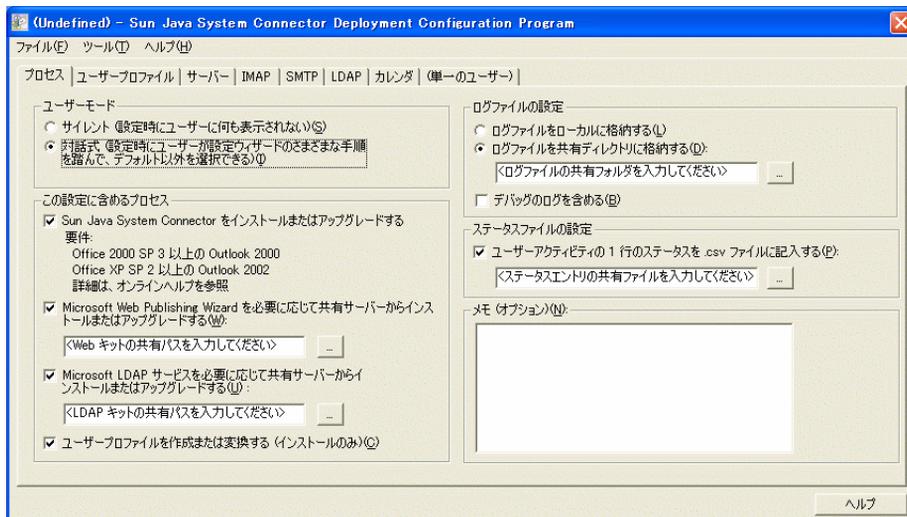
ここでは、単一のユーザー向け、または全員が Connector for Microsoft Outlook を同じようにインストールおよび設定する特定のユーザーグループ向けの単一デスクトップインストールパッケージの作成手順について説明します。ユーザーグループごとに設定を変えた複数のデスクトップインストールパッケージを作成するには、作成するパッケージごとにこの手順を繰り返します。

エンドユーザーのデスクトップインストールパッケージを作成するには、次の手順に従います。

1. C:\Program Files\Sun\Deployment Configuration Program\内、デスクトップ上のショートカットアイコン、または「スタート」プログラムメニューから Admin.exe ファイルを探して起動 (ダブルクリック) します。

図 2-1 に示すように、配備設定プログラムの設定ウィンドウがデスクトップに表示されます。

図 2-1 配備設定プログラム:設定ウィンドウ



設定ウィンドウは、次の要素で構成されています。

- Sun Java System Connector のエンドユーザーの設定に応じた情報を入力する 8 つのタブパネル (以下で個別に説明)
- 「ヘルプ」ボタン。現在表示されているパネルで利用できる入力オプションに関する情報を表示した個別のウィンドウを開く
- 「ファイル」、「ツール」、「ヘルプ」の 3 つのメニュー

「ファイル」メニューおよび「ヘルプ」メニューでは、ファイル管理に関する Windows 標準の機能を提供し、配備設定プログラムに付属のオンラインヘルプシステムへ状況に応じてアクセスします。

- 「ファイル」メニュー: 「新規作成」、「開く ...」、「上書き保存」、「名前を付けて保存」、「印刷設定 ...」、「印刷 ...」、および「終了」
- 「ツール」メニュー: 「パッケージを作成」
- 「ヘルプ」メニュー: 「配備ヘルプ」および「配備設定プログラムについて」

「ツール」メニューの「パッケージを作成」オプションを使用すると、この設定ウィンドウで開いている既存の .ini 設定ファイルで新しいインストールパッケージを作成できます。「ファイル」> 「開く ...」を使用すると、既存の .ini ファイルを探して開くことができます。

2. 以下で個別 (タブごと) に説明されているとおりに、8 つのタブパネルに情報を入力します。各タブをクリックしてその関連パネルを表示します。

インストールパッケージの作成を開始し、後で完了することにした場合は、部分的に完了したパッケージを「ファイル」> 「上書き保存」で保存し、後で「ファイル」> 「開く ...」で開いて作業を再開し、完了できます。

3. 8つのタブパネルで必要な情報をすべて入力したら、「ファイル」>「上書き保存」を選択して設定内容を .ini ファイルに保存し、新しいインストールパッケージを作成します。「上書き保存」コマンドを選択すると、Windows 標準の保存ダイアログボックスが開きます。
4. ダイアログボックスで、.ini ファイルおよび .exe ファイルの適切なファイル名とパスを入力し、「上書き保存」ボタンをクリックします。

プログラムが実行中に、ログオンの失敗または必要なリソースが「見つかりません」と報告してきた場合。指定した場所にリソースが存在することがわかっている場合、配備設定プログラムの実行に使用している管理者アカウントは、リソースの置かれたファイルサーバーに対して認証されていません。すべてのリソースの場所にログインしていることを確認してから、配備設定プログラムを再度実行してください。

「上書き保存」コマンドによって、2つの新しいファイルが実際に作成されます。.ini ファイルは、「上書き保存」ダイアログボックスで指定したフォルダに保存され、.exe ファイル(.ini ファイルのコピーを含むバンドル版インストールパッケージ)はデフォルトで C:\Program Files\Sun\Deployment Configuration Program\Packages に保存されます。.ini ファイルおよび .exe ファイルはどちらも、「上書き保存」ダイアログボックスで指定したファイル名で保存されます。

「プロセス」タブ

図 2-2 には、「プロセス」タブが示されています。

図 2-2 配備設定プログラム：「プロセス」タブ



ユーザーモード

「サイレント」と「対話式」の2つのインストールオプションは、どちらか一方のみ選択できます。

「サイレント」 : ユーザーは一切介入せず、このプロセス用に管理者があらかじめ設定したパラメータに従って (配備設定プログラムのこのタブおよびその他のタブで設定したとおりに)、ユーザーのソフトウェアのインストールと設定が行われ、既存のデフォルトの Exchange ユーザープロファイルおよび既存の個人用フォルダ (.pst) ファイルが変換されます。

「対話式」 : ユーザーは、インストール、設定、および変換の各プロセスでいくつかの選択をする必要があります。ユーザーがどの程度介入するかは、管理者が配備設定プログラムのこのタブおよびその他のタブで設定した内容によって決まります。

この設定に含めるプロセス

ユーザーのデスクトップにこれらのソフトウェアコンポーネントをインストールするにはアクセス特権が必要になりますが、これは多くの場合、ほとんどのエンドユーザーには許可されていません。エンドユーザーがソフトウェアをインストールできないように「ロックダウン」した Windows 環境でネットワークが使用されている場合は、システム管理者がユーザーのデスクトップへソフトウェアを配布する「プッシュ」方式を使用して、ユーザーのアクセス特権の必要性を回避することをお勧めします。この「プッシュ」方式の配布については、[第3章の「「プッシュ」方式の配備 \(エンドユーザーがインストール特権を持たない場合 \)](#)」で説明します。

このパネルで提供されるプロセスのいずれかまたはすべてに関する詳細な説明、およびそれらをインストールする場合としない場合の影響については、『デスクトップ配備管理者ガイド』を参照してください。

Sun Java System のインストールとアップグレード。ユーザーの Outlook クライアントアプリケーションと Sun Java System サーバーの間に必要な継続通信を容易にするソフトウェアをインストールするよう、ユーザープログラムに指示します。Sun Java System Connector for Microsoft Outlook がすでにインストールされている場合は、インストールされているバージョンを確認し、必要に応じて新しいバージョンにアップグレードします。

Sun Java System Connector for Microsoft Outlook のシステム要件は次のとおりです。

- Windows 2000 または Windows XP オペレーティングシステム
- Office 2000 Service Pack 3 以上の Outlook 2000、または Office XP Service Pack 2 以上の Outlook 2002

- Microsoft Outlook がユーザーのデフォルトの電子メールクライアントとして指定されている必要がある。Outlook が、ユーザーのデフォルトの電子メールクライアントとして設定されていない場合は、第 3 章の「ユーザーのデフォルトの電子メールクライアントとして Microsoft Outlook を指定する方法」でこの問題の解決手順を参照
- Connector ソフトウェアは、Connector for Microsoft Outlook と互換性のない Sun ONE Sync プログラムが同時に存在するワークステーションにはインストールできない。Sun ONE Sync プログラムが特定のユーザーのデスクトップにインストールされている場合は、それを削除する必要がある（手順については第 3 章の「ユーザーのワークステーションから Sun ONE Sync プラグラムを削除する方法」を参照）

Sun Java System Connector for Microsoft Outlook セットアップウィザードは、以上の要件と実際のインストール環境との不一致をすべて検出し、不一致がある場合、Sun Java System Connector for Microsoft Outlook をインストールしません。

「Microsoft Web Publishing Wizard を必要に応じて共有サーバーからインストールまたはアップグレードする」：ユーザーの「空き時間」情報を Sun Java System Calendar Server で使用できるようにするための Microsoft Web 発行ウィザード (WPW) をインストールするよう、ユーザープログラムに指示します。WPW がすでにインストールされている場合は、インストールされているバージョンを確認し、必要に応じて新しいバージョンにアップグレードします。

「<Web キットの共有パスを入力してください>」：Web 発行ウィザードのインストールキットがあるネットワーク上の場所を指定します。

「Microsoft LDAP サービスを必要に応じて共有サーバーからインストールまたはアップグレードする」：Connector for Microsoft Outlook と Sun Java System ディレクトリ間の通信を実行するための、Outlook 2000 の LDAP コンポーネントをインストールするよう、ユーザープログラムに指示します。LDAP コンポーネントがすでにインストールされている場合は、インストールされているバージョンを確認し、必要に応じて新しいバージョンにアップグレードします。このコンポーネントは、ユーザーの一部が Outlook 2000 を使用している場合にのみ必要であり、すべてのユーザーが Outlook 2002 を実行している場合は必要ありません。Connector for Microsoft Outlook では、Sun Java System ディレクトリとの通信に LDAP サービスを使用し、LDAP プロトコルは Outlook 2002 の標準機能です。Outlook 2000 では、LDAP プロトコルはオプションの機能であり、Microsoft Office の標準インストールには含まれません。Outlook 2000 を使用しているユーザーが 1 人でもいる場合は、LDAP コンポーネントをインストールするために、対応する元のインストール CD またはインストールファイルが必要です。これらのキットは、Microsoft 製品なので、Desktop Deployment Toolkit パッケージには含まれていません。詳細については、『デスクトップ配備管理者ガイド』の「Deployment Toolkit のコンポーネント」を参照してください。

「<LDAP キットの共有パスを入力してください>」: ユーザーが使用する Outlook 2000 のバージョンのインストールファイルがあるネットワーク上の場所を指定します。

注 ログファイルの参照機能で、指定する必要がある場所が表示されない(ただし、存在することはわかっている)場合:これが発生することはほとんどありませんが、参照先のドメイン内で認証されていない場合に起こります。この問題を修正するには、対象コンピュータを右クリックして「エクスプローラ」を選択し、管理者自身の UserID とパスワードを入力します。その後、参照機能に戻り、参照する必要があるコンピュータを選択できます。

「ユーザープロファイルを作成または変換する」: ユーザープログラムで既存の適格な Outlook ユーザープロファイルを変換するか、または新しい Sun Java System Connector で使用するための新しいプロファイルを作成できるよう、「ユーザープロファイル」タブパネルをアクティブにします。ユーザープログラムは、次のような「適格な」プロファイルのみ変換します。

- Microsoft Exchange Server メッセージサービスが含まれている
- 以前実行したユーザープログラムによって(変換される .pst ファイルのすべてが)完全には変換されていない(ただし、部分的に変換されたプロファイルの残りの未変換 .pst ファイルを変換することは可能)

このボックスを選択しない場合、「ユーザープロファイル」パネル全体がグレー表示されて使用不可能になり、ユーザープロファイルの変換または作成は行われません。たとえば、プロファイルの変換または作成を行わずに MAPI サービスをインストールまたはアップグレードするだけのユーザーインストールパッケージを作成することができます。

ログファイルの設定

これらの設定は、ユーザープログラムでユーザーの移行セッションに関するログファイルの書き込みをおこなうディレクトリに関するものです。最初の2つのラジオボタンのオプションは、どちらか一方のみ選択できます。

- 「**ログファイルをローカルに格納する**」: ユーザーのローカル一時ディレクトリにログファイルを書き込むよう、ユーザープログラムに指示します。
- 「**ログファイルを共有ディレクトリに格納する**」: 特定の共有ディレクトリにログファイルを書き込むよう、ユーザープログラムに指示します。

- 「< ログファイルの共有フォルダを入力してください >」: ログファイルを格納する共有フォルダを指定します。ドライブ文字または UNC パスを入力できます。

ログファイルの参照機能で、指定する必要がある場所が表示されない(ただし、存在することはわかっている)場合:これが発生することはほとんどありません。参照先のドメイン内で認証されていない場合に起こります。この問題を修正するには、対象コンピュータを右クリックして「エクスプローラ」を選択し、管理者自身の UserID とパスワードを入力します。その後、参照機能に戻り、参照する必要があるコンピュータを選択できます。

- 「デバッグのログを含める」: より詳細で明確なデバッグ形式で動作をログに記録するよう、ユーザープログラムに指示します。ユーザーがインストールパッケージを使用するときに問題が起こり、デフォルトの形式のログエントリでは問題を診断できない場合、より詳細なデバッグ形式のログを記録すると、管理者自身や他の管理者が問題を解決するための十分な追加情報を提供できます。このオプションは、デフォルトではオフになっています。

ステータスファイルの設定

「ユーザーアクティビティの 1 行のステータスを .csv ファイルに記入する」: 付随するボックス(下方)で指定した .csv ファイルにユーザーアクティビティの概要を追加します。各行は、1 人のユーザーによるデスクトップツールの 1 回の実行を示します。1 人のユーザーがツールを複数回実行すれば、.csv ファイルに複数の行が作成されます。

- 「< ステータスエントリの共有ファイルを入力してください >」: 状態エントリを格納する共有ファイルを指定します。このファイルがすでに存在する場合は、インストールキットが実行されるたびに更新されます。

「メモ」(オプション)

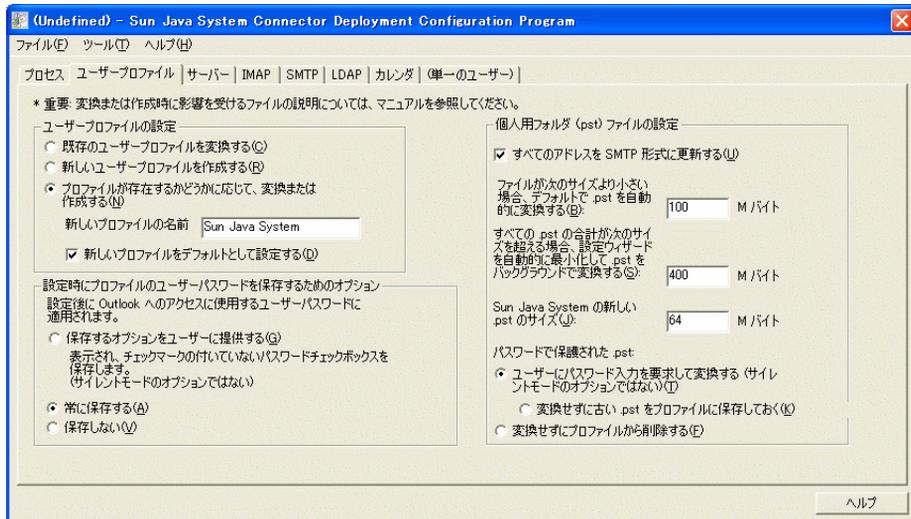
この設定に関する注意事項やコメントを含める場合は、このフィールドに追加できません。

「ユーザープロファイル」タブ

「ユーザープロファイル」パネルの設定は、[図 2-3](#) に示すように、このパッケージでユーザープロファイルを作成または変換する場合にのみ適用されます。したがって、このパネルの機能は「プロセス」タブパネルで「ユーザープロファイルを作成または変換する」オプションを選択している場合にのみ使用できます。「ユーザープロファイルを作成または変換する」オプションが選択されていない場合は、この「ユーザープロファイル」パネル全体がグレー表示されます。

このパネルの設定によって、Exchange ユーザーの連絡先、履歴、およびメモのデータをローカル (デスクトップ) の Sun Java System Connector の個人用フォルダ (.pst) ファイルに変換する方法が決まります。

図 2-3 配備設定プログラム: 「ユーザープロファイル」タブ



ユーザープロファイルの設定

このセクションのオプションを選択すると、ユーザープロファイルの変換および作成を行うかどうか、およびその方法を指定できます。

- 「**既存のユーザープロファイルを変換する**」: 次のどちらかの方法で既存の Outlook プロファイルを変換するよう、ユーザープログラムに指示します。
 - 「**サイレントモード**」: ユーザーのデフォルトのプロファイルが見つかった場合はそれを変換し、デフォルトのプロファイルが見つからなかった場合は何もしません。
 - 「**対話式モード**」: Exchange サーバーに接続する適格なプロファイルが 2 つ以上見つかった場合、またはユーザーのデフォルトとして設定されていない適格なプロファイルが 1 つだけ見つかった場合は、変換するプロファイルを 1 つ選択します。適格なプロファイルが 1 つだけ見つかり、それがユーザーのデフォルトとして設定されている場合は、ユーザーに知らせずに、そのプロファイルが自動的に変換されます。適格なプロファイルが見つからなかった場合は、ユーザープロファイルの変換も作成も行われません。

ユーザープログラムでは、次のような「適格な」プロファイルのみが変換されることに留意してください。

- Microsoft Exchange Server メッセージサービスが含まれている
- 以前実行したユーザープログラムによって (変換される .pst ファイルのすべてが) 完全には変換されていない (ただし、部分的に変換されたプロファイルの残りの未変換 .pst ファイルを変換することは可能)
- 「**新しいユーザープロファイルを作成する**」: そのユーザーに関してすでに存在している既存のプロファイルを無視して、新しい Outlook ユーザープロファイルを作成するよう、ユーザープログラムに指示します。同じユーザーがインストールを 2 回以上実行しても、そのユーザーに関する新しいプロファイルは 1 つしか作成されません。
- 「**プロファイルが存在するかどうかに応じて、変換または作成する**」: 次のどちらかの方法で、既存の Outlook ユーザープロファイルが見つかった場合はそれを変換し、既存のプロファイルが見つからない場合は新しいプロファイルを作成するよう、ユーザープログラムに指示します。
 - 「**サイレントモード**」: ユーザーのデフォルトの Outlook プロファイルが見つかった場合はそれを変換し、デフォルトのプロファイルが見つからなかった場合は新しいプロファイルを作成します。
 - 「**対話式モード**」: Exchange サーバーに接続する適格なプロファイルが 2 つ以上見つかった場合、またはユーザーのデフォルトとして設定されていない適格なプロファイルが 1 つだけ見つかった場合は、変換するプロファイルを 1 つ選択します。適格なプロファイルが 1 つだけ見つかり、それがユーザーのデフォルトとして設定されている場合は、ユーザーに知らせずに、そのプロファイルが自動的に変換されます。適格なプロファイルが見つからなかった場合は、新しいプロファイルが作成されます。

- 「新しいプロファイルの名前」：Outlook のユーザーログオン画面に表示されるドロップダウンリストボックスに新しいプロファイルを表示するときの名前です。
- 「新しいプロファイルをデフォルトとして設定する」：このボックスを選択すると、新しいプロファイルはユーザーのデフォルトの Outlook プロファイルとして設定されます。

設定時にプロファイルのユーザーパスワードを保存するためのオプション

- 「保存するオプションをユーザーに提供する」：Outlook でログインするたびにパスワードを入力するか、パスワードを保存 (記憶) してログイン手順を省略できるようにするかをユーザーが選択するためのチェックボックスを表示するよう、ユーザープログラムに指示します。ユーザープログラム内では、このチェックボックスとともに表示される手順で、「チェックマークを付けると、Outlook を起動するたびにユーザー情報を入力する必要がなくなります。」と説明されます。このパッケージがサイレントモードで実行するように設定されている場合は、このオプションは使用できません。
- 「常に保存する」：上記(「保存するオプションをユーザーに提供する」)のオプションをユーザーに表示しないよう、ユーザープログラムに指示します。代わりに、「パスワードが保存されます。Outlook を起動するたびにパスワードを入力する必要がなくなります。」というメッセージが画面に表示されます。
- 「保存しない」：パスワードに関するオプションをユーザーに表示せず、デフォルトで、Outlook では常にユーザーパスワードを入力するよう、ユーザープログラムに指示します。ユーザープログラムでは、チェックボックスや関連する説明テキストは表示されません。

個人用フォルダ (.pst) ファイルの設定

「すべてのアドレスを SMTP 形式に更新する」：個人用フォルダ (.pst) ファイル内に含まれるすべてのアドレスを SMTP (インターネット標準) 形式に変換するよう、ユーザープログラムに指示します。

「ファイルが次のサイズより小さい場合、デフォルトで .pst を自動的に変換する：

____ M バイト」：サイレントモードでは、ここで指定したサイズと同じかまたはそれよりも大きい .pst ファイルはすべて無視されます (変換されない)。対話式モードでは、指定サイズと同じかまたはそれよりも大きい既存の .pst ファイルがある場合、ユーザーはどの大きなファイルを (存在する場合は) 変換するかを指定します。

「すべての .pst の合計が次のサイズを超える場合、設定ウィザードを自動的に最小化して .pst をバックグラウンドで変換する：____ M バイト」：この設定は、サイレントモードでは関係ありません。対話式モードでは、変換するすべての .pst ファイルの合計サイズがここで指定したサイズを超える場合、最初にプロファイルが変換され、その後ユーザープログラムは自動的にユーザーのタスクバーに最小化され、バックグラウンドプロセスとして .pst ファイルが変換されます。プロファイルが変換された時点で、ユーザーは Outlook を起動し、変換されたプロファイルにアクセスできます。

「Sun Java System の新しい .pst のサイズ：____ M バイト」：古い Exchange サーバーから選択された項目のコピー先となる新しい .pst ファイルに必要なディスク容量の予測量です。使用可能なディスク容量がない場合、ユーザープログラムは変換を中止します。.pst のサイズが大きくなると予測される特別な理由がない限り、この値はデフォルト設定のままにします。

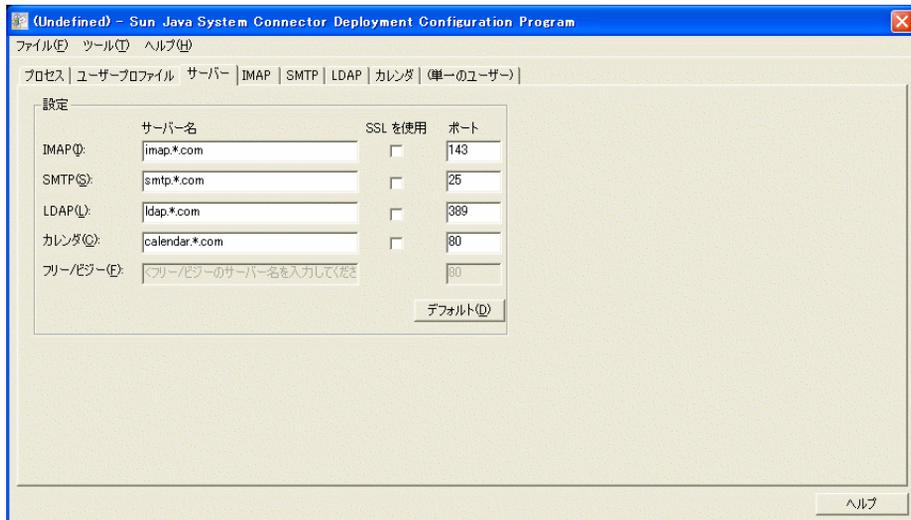
「パスワードで保護された .pst」：パスワードで保護された .pst ファイルを変換する場合のオプションを、次の中から 1 つだけ選択します。

- 「ユーザーにパスワードを要求して変換する (サイレントモードのオプションではない)」：各 .pst ファイルを開いて変換するときにユーザーにパスワードを入力するよう、ユーザープログラムに指示します。
- 「変換せずに古い .pst をプロファイルに保存しておく」：.pst ファイルを変換せずに、プロファイル内に未変換の .pst ファイルを保持するよう、ユーザープログラムに指示します。
- 「変換せずにプロファイルから削除する」：.pst ファイルを変換せずに、プロファイルから未変換の .pst ファイルを削除するよう、ユーザープログラムに指示します (ただし、古い .pst ファイルがユーザーのハードドライブから物理的に削除されることはない)。

「サーバー」タブ

図 2-4 には、「サーバー」タブが示されています。

図 2-4 配備設定プログラム：「サーバー」タブ



注 Calendar Server で「**SSL を使用**」ボックスが選択されていない場合、「空き時間」情報サーバーの値はカレンダーと同じになるので、このパネルの「空き時間」の行はグレー表示されます。ただし、カレンダーで「**SSL を使用**」が選択されている場合は、空き時間情報用に別のポートを指定する必要があります。

設定

「サーバー名」: IMAP、SMTP、LDAP、カレンダー、および空き時間の各 Sun Java System サーバーのホスト名です。

「SSL を使用」: 関連サーバーへの接続に SSL が必要な場合は、このボックスを選択します。

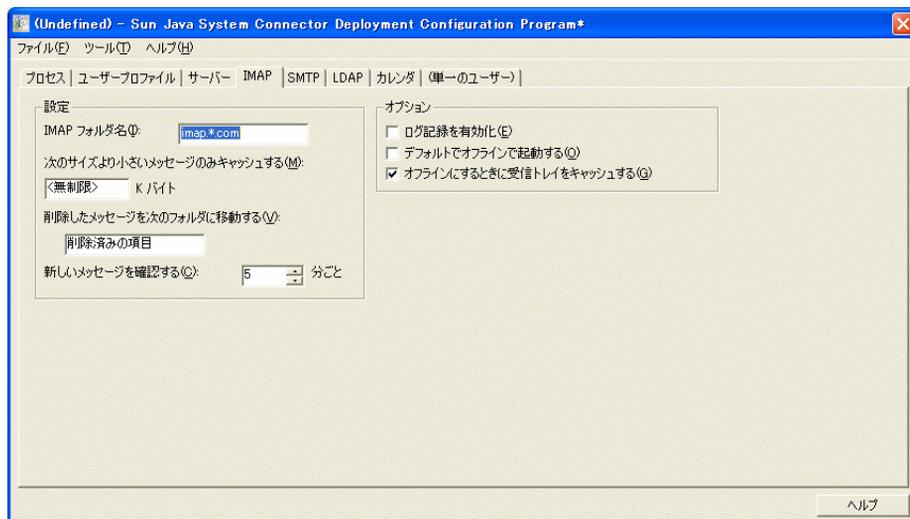
「ポート」: 各サーバーのデフォルトのポート番号です。サーバーとの接続に SSL を使用する場合は、デフォルト値が変わります。

「デフォルト」: すべてのポート番号を元のデフォルト値に戻します (値を変更したがデフォルトに戻したい場合)。SSL と非 SSL ではデフォルト値が異なり、この機能では、「SSL を使用」ボックスが選択されているかどうかによって、そのサーバーに適したデフォルト値に戻されます。

「IMAP」タブ

図 2-5 には、「IMAP」タブが示されています。

図 2-5 配備設定プログラム: 「IMAP」タブ



設定

「IMAP フォルダ名」: Outlook のフォルダー一覧の「IMAPSP フォルダ」アイコンの横に表示される名前です。指定しなかった場合は、(同じ配備設定プログラムの「サーバー」タブパネルから)「サーバー名」フィールドがフォルダ名として表示されます。

「次のサイズより小さいメッセージのみキャッシュする: ____ K バイト」: IMAPSP ローカルメッセージキャッシュのメッセージ単位のサイズ制限です。このオプションには主に、ユーザーがオフライン操作になったときのダウンロード時間を減らす目的があります。ただし、メッセージがキャッシュされていない場合は再取得する必要があります。そのため、この値はオンラインモードの再表示時間にも影響します。

「削除したメッセージを次のフォルダに移動する」: 削除されたメッセージの移動先にする IMAP trash 用フォルダの名前です。

「新しいメッセージを確認する: ____ 分ごと」: サーバーのメールボックスに新しく届いたメッセージをポーリングする間隔(分単位)です。新しいメッセージが届いた場合、メールボックスは更新され、Outlook に再表示されます。このフィールドが空の場合、または 0 に設定されている場合は、このサーバー接続ではポーリングは行われません。

オプション

「ログを記録」: コンピュータの一時ディレクトリ内の ISTOREX.LOG(x は曜日を表す 1 から 7 までの数値) という名前のファイルにログ、エラー、およびトレースに関する情報を送信します。最後の 3 日間のログのみ保存されます。

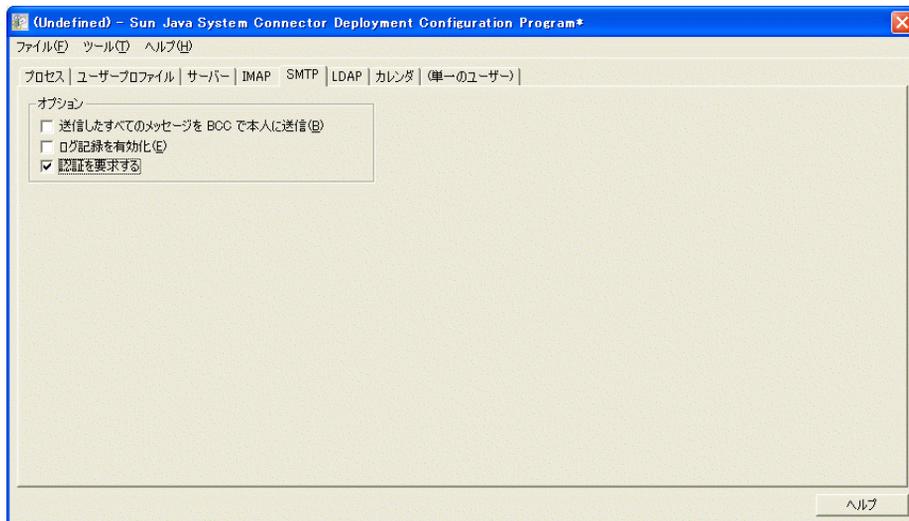
「デフォルトでオフラインで起動する」: 最初にサーバーへの接続を行わず、ユーザーがオンラインになるにはオンラインモードメニューを実行しなければならないよう、IMAPSP を設定します。

「オフラインにするときに受信箱をキャッシュする」: ユーザーがオフライン状態になるときに受信トレイをキャッシュするよう、IMAPSP を設定します。また、Outlook でフォルダエントリを強調表示して「プロパティ」メニューを実行し、「IMAPSP」タブをクリックして「このフォルダのすべてのメッセージ部分(添付ファイル)をキャッシュ」オプションをオンにすることにより、ユーザーがメールボックスのキャッシュ状態を設定することもできます。

「SMTP」タブ

図 2-6 には、「SMTP」タブが示されています。

図 2-6 配備設定プログラム：「SMTP」タブ



オプション

「送信したすべてのメッセージを BCC で本人に送信」：すべての送信メッセージの BCC フィールドにユーザーの電子メールアドレスを自動的に挿入する（送信したメッセージのコピーを送信者が効率的に保管できる）よう、ユーザーソフトウェアを設定します。メッセージは、送信者のサーバーの受信トレイ内に保管され、その後はサーバーベースのメッセージフィルタリングルールが適用されます。

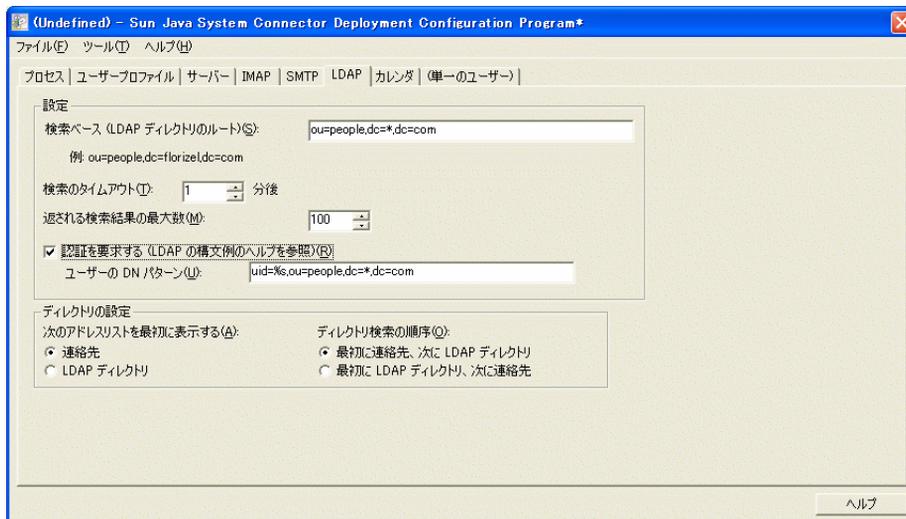
「ログを記録」：コンピュータの一時ディレクトリ内の `ISSMTPx.LOG` (x は曜日を表す 1 から 7 までの数値) という名前のファイルにログ、エラー、およびトレースに関する情報を送信します。最後の 3 日間のログのみ保存されます。

「認証を要求する」：送信 SMTP メールでユーザー認証が必要となるように SMTP サービスを設定するよう、ユーザーソフトウェアに指示します。

「LDAP」タブ

この「LDAP」タブパネルでは、[図 2-7](#) に示すように、Outlook LDAP ディレクトリサービスの設定を指定できます。

図 2-7 配備設定プログラム：「LDAP」タブ



設定

「検索ベース」：LDAP ディレクトリのルートの LDAP 識別名です。たとえば、ディレクトリの最上位が o=florize1.com で、組織単位のアドレス帳の名前が ou=People の場合、検索ベースは「ou=People,o=florize1.com」のように設定する必要があります。

「検索のタイムアウト：__ 分後」：ディレクトリ検索時間を、指定した時間 (分) に制限します。

「返される検索結果の最大数」：検索によって返されるエントリ数を、ここで指定した数に制限します。

「認証を要求する」：各ディレクトリ検索で、ユーザーの識別名 (DN) の形式でのユーザー認証が必要となるように LDAP ディレクトリサービスを設定するよう、ユーザーソフトウェアに指示します。

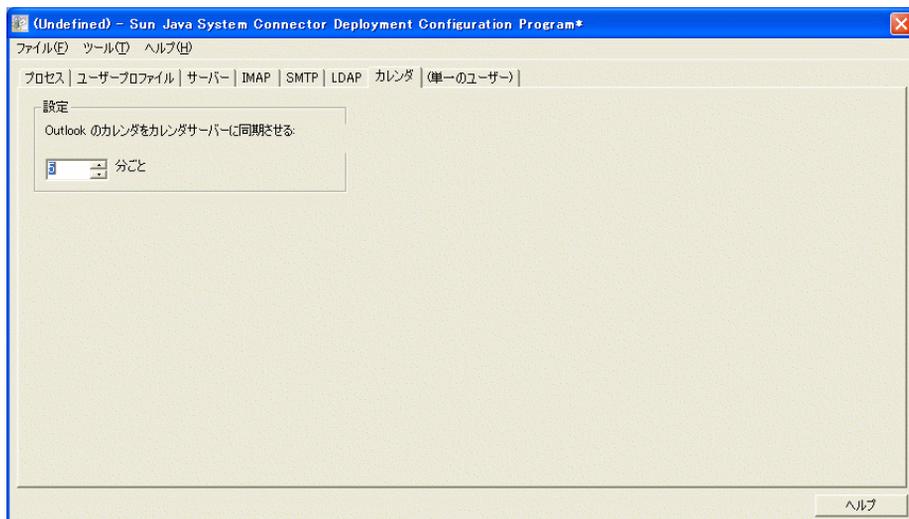
- 「ユーザーの DN パターン」: ユーザーの識別名 (DN) の要素です。アSEMBLされたときに、LDAP ディレクトリサービスに対してユーザーの ID を認証するための完全な DN を構成します (認証が必要な場合)。たとえば、ユーザー ID (uid)、組織単位 (ou)、および組織 (o) で構成される DN を定義する場合は、「uid=%S,ou=people,o=florizel.com」のようになります。

同様に、共通名、組織、および国で構成される DN を定義する場合は、「cn=Fred Smith,o=florizel.com,c=US」のようになります。

「カレンダー」タブ

図 2-8 には、「カレンダー」タブが示されています。

図 2-8 配備設定プログラム: 「カレンダー」タブ



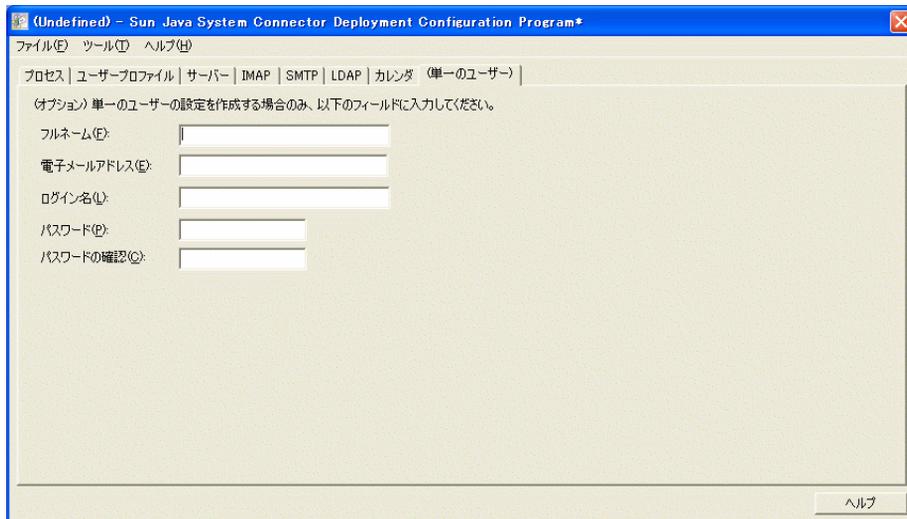
設定

「Outlook のカレンダーをカレンダーサーバーに同期させる: ___ 分ごと」: Outlook 予定表が Calendar Server と同期をとる頻度を指定します。

「単一のユーザー」タブ

「単一のユーザー」タブパネルでは、[図 2-9](#) に示すように、単一の特定期ユーザーの ID を指定および認証できます。このパネルは、1 人の特定期ユーザーのためのインストールキットを作成する場合にのみ使用します。

図 2-9 配備設定プログラム：「単一のユーザー」タブ



設定

「フルネーム」：このユーザーの電子メールアドレスに関連付ける表示名を指定します。メッセージを送信するときに、ユーザーの送信メッセージの差出人ボックスにこの名前が表示されます。

「電子メールアドレス」：他のユーザーがこのアカウントのユーザーにメールを送信するときに使用する電子メールアドレスを指定します。このアドレスは「name@florize1.com」の形式でなければなりません。

「ログイン名」：このユーザーのアカウント名を指定します。IMAP サーバーとカレンダーサーバーの両方で同じ値にする必要があります。多くの場合、ユーザーの電子メールアドレスの @ 記号の左側部分と同じになります。

「パスワード」：このユーザーのアカウントパスワードを指定します。IMAP サーバーとカレンダーサーバーの両方で 1 つの共有パスワードを使用する必要があります。

「パスワードの確認」：ユーザーのアカウントパスワードと重複するフィールドであり、タイプミスに対する防止策として入力する必要があります（この値は、上記の「パスワード」の値と一致する必要があります）。

「単一のユーザー」タブ

特殊な環境に関するアプリケーションノート

「プッシュ」方式の配備 (エンドユーザーがインストール特権を持たない場合)

管理者は、配備設定プログラムを使用してインストールパッケージを作成できます。エンドユーザーはこのパッケージを使用して、自身のローカルデスクトップコピーの Connector for Microsoft Outlook ソフトウェアをインストールおよび設定できます。ただし、ソフトウェアのインストールにはアクセス特権が必要になりますが、多くの場合、ほとんどのエンドユーザーには許可されていません。したがって、ほとんどの企業では、システム管理者からユーザーのデスクトップへソフトウェアを配布する「プッシュ」方式を採用しています。これにより、ユーザーのアクセス特権の必要性が回避されます。エンドユーザーがソフトウェアをインストールできないように「ロックダウン」した Windows 環境で、ネットワークが使用されている場合は、それぞれのデスクトップに何度もアクセスせずに済むように、このような自動設定管理を使用することをお勧めします。

ここでは、Microsoft の SMS 管理ツールを使用して、Sun Java System Connector for Microsoft Outlook をユーザーのデスクトップに配布する「プッシュ」方式について説明します。配備設定プログラムでは、Connector for Microsoft Outlook ソフトウェアをインストールし、新しいソフトウェアで使用するために既存の Outlook プロファイルおよびデータファイルを変換するデスクトップインストールパッケージを準備できます。ユーザーが十分な管理者特権を持ち、自身のデスクトップに新しいソフトウェアをインストールできる場合は、インストールパッケージを準備するだけで、インストールと変換の両方を一度に実行できます。インストールパッケージを実行するユーザーに、ソフトウェアをインストールするための管理者特権がない場合は、パッケージのインストールは実行できず、変換は失敗します。

ユーザーが自身のソフトウェアをインストールできない場合は、SMS インストールパッケージでインストール機能だけを実行できるように、2 つの作業を切り離す必要があります。SMS インストールパッケージは、十分な管理者特権を持つローカルの SMS アカウントにより、各ユーザーのデスクトップで実行できます。したがって、ローカルデスクトップでの新しいソフトウェアのインストールが認可されます。

Connector for Microsoft Outlook に必要なソフトウェアをインストールした後、配備設定プログラムを使用して、既存の Outlook プロファイルおよびデータファイルを新しい Connector for Microsoft Outlook で使用できるように変換する、もう 1 つのインストールパッケージを準備します。

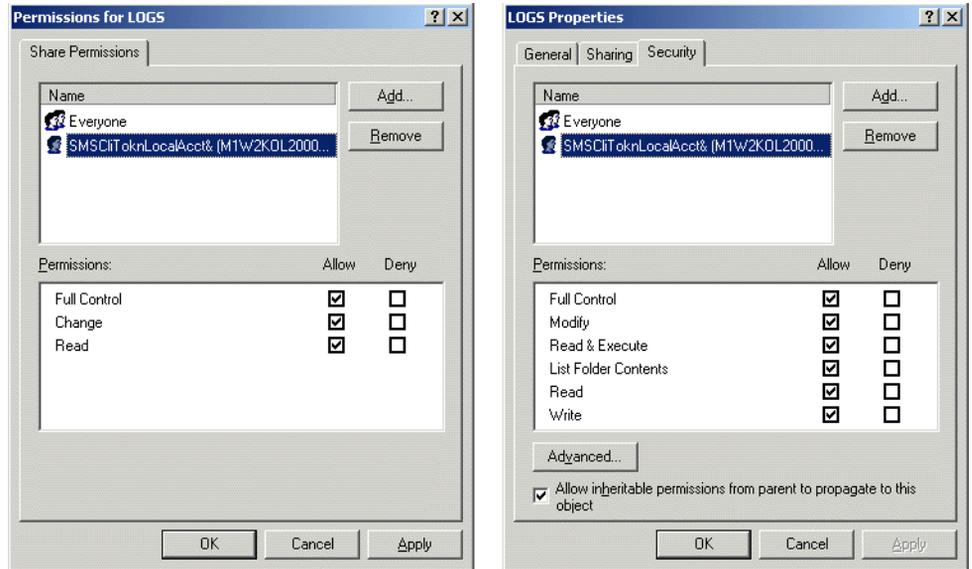
変換機能によって、デスクトップインストールプログラムを実行する特定のユーザーに関連した既存の Outlook プロファイルおよびデータファイルがすべて変換されます。ただし、最初のインストールパッケージを実行する SMS アカウントは、管理者特権を持った汎用のアカウントであるため、ソフトウェアをインストールできますが、どの特定のユーザーとも関連していません。したがって、インストール作業と変換作業は、2 つの別々のインストールパッケージで実行する必要があります。これは、ソフトウェアの物理的なインストールに必要な汎用の SMS アカウントでは、ユーザーの既存のプロファイルおよびデータファイルの変換に必要なユーザーの特定ができないためです。

一般的な SMS 「プッシュ」の事例は、以下の 5 つの手順で構成されます。

手順 1: 必要な共有フォルダの準備

エンドユーザーのデスクトップと同じ SMS サイトの一部であるコンピュータ上に、LDAP、LOGS、SJSC、WPW という 4 つの新しい共有ディレクトリを作成します。Windows NT ローカルアカウントでは、[図 3-1](#) の「アクセス権」ウィンドウ (左) で示すように、4 つのフォルダすべてに対するフルコントロールの共有アクセス権を SMSCLI\TokenLocalAcct\$ アカウントに割り当てる必要があります。

図 3-1 LOGS 共有フォルダのアクセス権の設定 (左) とプロパティ (右)



このように割り当てることにより、これらのディレクトリへの必要な読み込みおよび書き込みアクセス権が SMS ローカルアカウント (パスワードが必要) に与えられ、ゲストのアクセスに対してシステムを公開せずに済むようになります。また、図 3-1 の LOGS フォルダのプロパティウィンドウ (右) で示すように、4 つの NTFS フォルダすべてへのフルコントロールのアクセス権を、SMSCLiToknLocalAcct\$ に割り当てます。

手順 2: 必要なソフトウェアをインストールするための Connector for Microsoft Outlook インストールパッケージの準備

配備設定プログラム (Admin.exe) を使用して、必要なソフトウェアを各ユーザーのデスクトップにインストールするだけで、既存の Outlook プロファイルおよびデータファイルを変換しない、インストールパッケージを作成します。Admin.exe プログラムについては、前述の第 2 章 (「エンドユーザーのインストールパッケージの作成」) で説明していますが、「プロセス」タブで、SMS 配布用パッケージの準備に必要な、次の特別な条件を確認してください。

- 「ユーザーモード」が「サイレント」に設定されていることを確認する
- 「ユーザープロファイルを作成または変換する」の選択が解除されていることを確認する
- 4 つのすべてのパスフィールドについて UNC パス (¥¥servername¥sharename) を使用する

手順 3: SMS インストールパッケージによる最初の Sun Java System インストールパッケージのユーザーデスクトップへのプッシュ

Microsoft の SMS パッケージウィザードを使用して、手順 2 で作成した Sun Java System Connector インストールパッケージを含むインストールパッケージを準備します。続いてパッケージを「プッシュ」すると、ユーザーが一切操作することなく、自動的にユーザーデスクトップ上で実行されます。

1. SMS 2.0 Management コンソールを起動します。Connector for Microsoft Outlook をプッシュするコレクションを右クリックして、「**Distribute Software**」をクリックします。SMS の Distribute Software ウィザードが起動します。
2. Distribute Software ウィザードの「Welcome」画面で、「**Next**」をクリックして開始します。
3. 「Package」画面で、「**Create a new package and program**」オプションを選択して、「**Next**」をクリックします。
4. 「Package Identification」画面で、 3-2 に示すように適切な値を入力し、「**Next**」をクリックします。

図 3-2 SMS Distribute Software ウィザード : Package Identification

Distribute Software Wizard

Package Identification
Specify information to identify the new package.

Name: Sun Java System Services Rollout

Version: 1.0

Publisher: Sun

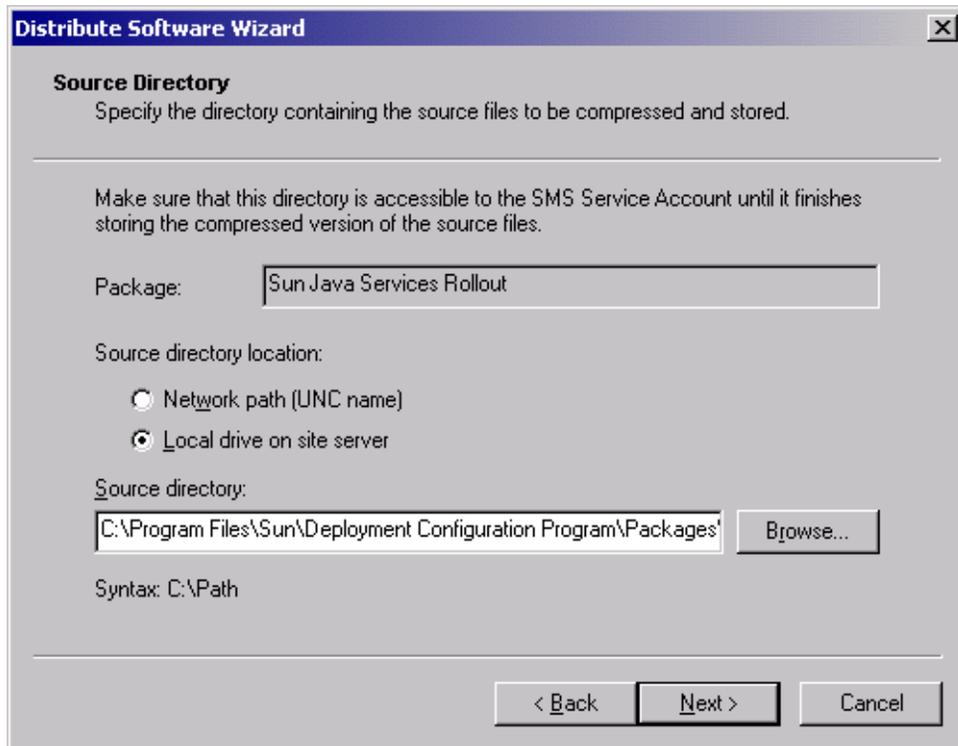
Language: English

Comment: Deployment of Sun Java System Connector for Microsoft Outlook, Web Publishing Wizard, and LDAP Services for non-privileged users.

< Back Next > Cancel

5. 「Source Files」画面で、「**Create a compressed version of this source**」を選択し、「**Next**」をクリックします。
6. 「Source Directory」画面で、「**Browse**」ボタンをクリックし、図 3-3 に示すように、Connector for Microsoft Outlook インストールパッケージを作成したディレクトリを探して指定します。パス指定はローカルでも UNC でもかまいません。正しいパスを指定したら、「**Next**」をクリックします。

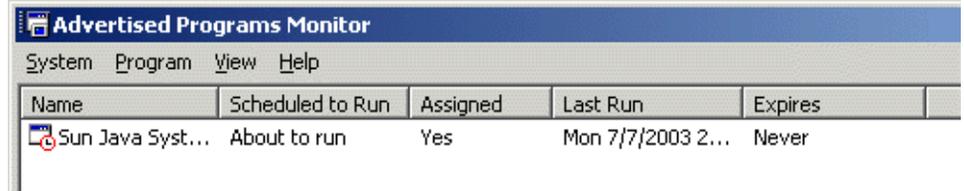
図 3-3 SMS Distribute Software ウィザード: 「Source Directory」画面



7. 「Program Identification」画面で、「**Browse**」ボタンをクリックして、**コマンド行**で使用する .exe ファイルのプログラム名を探して指定し、「**Next**」をクリックします。
8. 「Program Properties」画面で、プログラムが、**管理者権限で実行される**ことを確認し、「**Next**」をクリックします。
9. 「Advertise a Program」、「Advertisement Target」、「Advertisement Name」、「Advertise to Sub collections」、「Advertisement Schedule」の5つの画面で、プログラムを通知するかどうか、通知する場合はその方法を指定します。オプションを選択したら、「**Next**」をクリックして、それぞれの次の画面に進みます。
10. 「Assign Program」画面で、「**Yes**」を選択してプログラムを割り当て、割り当ての日時を指定し、「**Next**」をクリックします。
11. 「Completing...」画面で、このインストールパッケージの作成に使用する設定を確認します。ここで「**Back**」ボタンを使用して設定画面に戻り、パッケージを実際に作成する前に、設定を変更することもできます。設定に間違いがなければ、「**Finish**」をクリックして、パッケージを作成します。このパッケージは続いて、このウィザードで指定した「Assignment」などのパラメータに従って、ユーザーのデスクトップにプッシュされます。

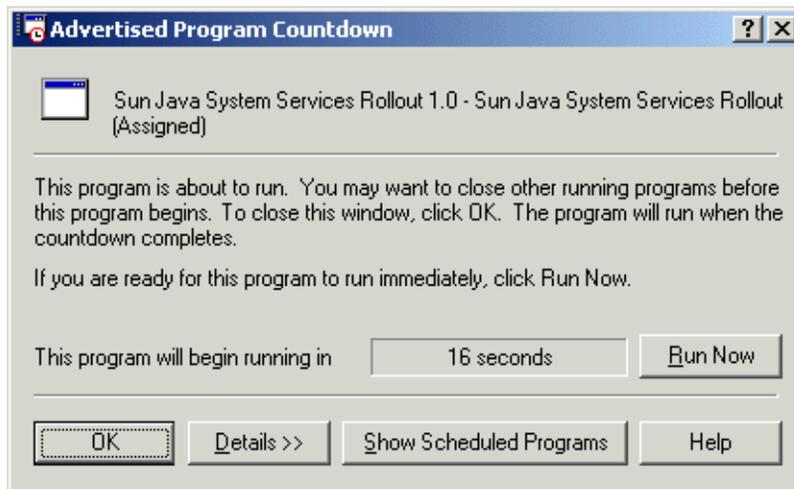
図 3-4 に示すように、ユーザーの「Advertised Programs Monitor」にパッケージがレポートされます。

図 3-4 ユーザーの「Advertised Programs Monitor」



どのような場合でも、図 3-5 に示すように、「Countdown」ダイアログボックスで、パッケージの実行が近づいていることをすべてのユーザーに知らせます。

図 3-5 ユーザーの「Countdown」ダイアログボックス



デスクトップインストールプログラム (desktop.exe) は、ローカルユーザーとして SMS 管理者プログラムによって実行されるので、ネットワーク共有が「everyone」グループで利用できる場合でも、ネットワーク共有へのアクセスにはパスワードが必要になります。ユーザーがインストールパッケージを実行するときに、ネットワークによって、ログディレクトリおよびインストールディレクトリへのアクセスが拒否された場合には、あるシステムのローカルアカウントで別のシステムのデータにアクセスできるように、ログファイルおよびインストールメディアが置かれたコンピュータのゲストアクセスを有効にします。

手順 4: 既存の Outlook プロファイルおよびデータファイルを変換する 2 番目の Sun Java System インストールパッケージの準備

Sun Java System 配備設定プログラム (Admin.exe) を使用して、Connector for Microsoft Outlook 用の 2 番目のインストールパッケージを作成します。このパッケージは、既存のすべての Outlook プロファイルおよびデータファイルを新しい Connector for Microsoft Outlook ソフトウェアで使用するための変換のみを行います。Admin.exe プログラムについては、前述の第 2 章 (「[エンドユーザーのインストールパッケージの作成](#)」) で説明していますが、「プロセス」タブで、このパッケージの準備に必要な、次の特別な条件を確認してください。

- 「ユーザーモード」を「対話式」に設定していること
- 「この設定に含めるプロセス」で
 - 「ユーザープロファイルを作成または変換する」オプションを選択していること
 - どのインストールとアップグレードのオプションも選択していないこと

手順 5: SMS インストールパッケージによる 2 番目の Sun Java System インストールパッケージのユーザーデスクトップへのプッシュ

Microsoft の SMS Packaging ウィザードを使用して、もう 1 つの SMS インストールパッケージを作成します。これには、手順 4 で作成した Sun Java System インストールパッケージが含まれます。「Program Properties」画面での次の選択以外は、最初の SMS インストールパッケージを準備したときに使用した、前述の手順 3 と同じ設定を使用します。

- 「Program can run」では、「Only when a user is logged on」オプションを選択する
- 「User input required」オプションを選択し、「Run with administrative rights」の選択が解除されていることを確認する

この最後の SMS パッケージでは、パスワードを入力するなどいくつかのユーザー操作が必要になりますが、デスクトップに新しいソフトウェアをインストールしないので、管理者特権は必要ありません。パスワード保護された Outlook 個人用フォルダ (.pst) ファイルへの変換プログラムのアクセスは、パスワードによって承認されます。

また、この手順 5 は、次の「[ユーザーのインストールパッケージ用のコマンド行スクリプト](#)」で説明するように、コマンド行から SMS スクリプトを使用して、インストールパッケージを実行して行うこともできます。

ユーザーのインストールパッケージ用のコマンド行スイッチ

前述の手順5の「プッシュ」方法(「**プッシュ**」方式の配備(エンドユーザーがインストール特権を持たない場合)参照)は、インストールパッケージをSMSスクリプトから実行して行うこともできます。この場合、コマンド行スイッチを使用して、実行時に、必要なユーザーパスワードを変換プログラムに渡します。これにより、ユーザーの操作を一切必要としない、完全に無人のインストールが可能になります。

たとえば、変換パッケージを実行するSMSパッケージを作成して、実行時に次のコマンドを発行するようにSMSサービスを設定できます。

```
DT_Package.exe
  /USERNAME=bcarpenter
  /PASSWORD=password
  /FULLNAME="Burns Carpenter"
  /EMAILADDRESS="burns.carpenter@florizel.com"
  /DN="uid=bcarpenter,ou=people,o=florizel.com,o=florizel.com"
```

注 この例や他のコマンド行の例では、読みやすくするために、このような書式で記述されていますが、すべてのスイッチは、1つの連続した文字列で入力します。ただし、多くの場合は自動的に複数行に折り返されます。

さらに、次のようにユーザーの環境変数を置き換える必要があります (NT ユーザー名と iPlanet ユーザー名が一致している場合)。

```
DT_Package.exe
  /USERNAME=%username%
  /PASSWORD=password
  /FULLNAME="Change This"
  /EMAILADDRESS=%username%@florizel.com
  /DN=uid=%username%,ou=people,o=florizel.com,o=florizel.com"
```

このコマンド行によって、SMSからの無人(または最小限のユーザー操作)のインストールが可能になります。このため、電子メールのリンクをクリックして、データを入力するようにユーザーに要求する場合に比べて、ヘルプデスクの呼び出しが大幅に減る可能性があります。

インストールパッケージでは、次のコマンド行スイッチをサポートしています。

- /USERNAME=xxx (xxx は、Sun サーバーのユーザー名)
- /PASSWORD=xxx (xxx は、Sun サーバーのパスワード)
- /FULLNAME=xxx (xxx は、ユーザーの表示名)
- /EMAILADDRESS=xxx (xxx は、ユーザーの電子メールアドレス)
- /DN=xxx (xxx は、Sun サーバーのユーザー DN)
- /NEWPROFILENAME=xxx (xxx は、作成したプロファイルの名前)
- /SAVEPASSWORD=*n* (*n* = 1 (保存する) または 0 (保存しない))

次のスイッチは、Exchange プロファイルを変換する場合に役に立ちます。

- /OLDDOMAIN=xxx (xxx は、Exchange ドメイン)
- /OLDUSERNAME=xxx (xxx は、Exchange ユーザー名)
- /OLDPASSWORD=xxx (xxx は、Exchange パスワード)

Exchange から Sun Java System へのターミナルサービスユーザーの移行

Connector for Microsoft Outlook 管理者ツールは、Windows ターミナルサービスの既存の Outlook ユーザーを、Exchange から Sun Java System サーバーへ移行する場合にも使用できます。以下で説明する方法では、次の環境を想定しています。

- Windows 2000 Server でターミナルサービスを使用している
- ターミナルサービスインストールファイルを使用して、Office 2000 Resource Kit CD (ORK) から Windows サーバーに Office 2000 がインストールされている
- Outlook 2000 がデフォルトの電子メールクライアントとして設定されている

手順 1: サーバーの準備

管理者としてサーバーのローカルコンソールにログオンし、Outlook をデフォルトの電子メールクライアントに設定します (まだ設定されていない場合)。次に、Web 発行ウィザードと Connector for Microsoft Outlook をインストールします。LDAP サービスをインストールする必要はありません。Office 2000 Resource Kit インストールファイルを使用すると、デフォルトでインストールされます。

手順 2: 適切なデスクトップインストールパッケージの作成

配備設定プログラムを使用して、サービスのインストールは一切行わず、Exchange から Sun Java System サービスへのプロファイルの変換のみを行う、デスクトップパッケージを作成します (ユーザーが、Exchange 以外の環境を使用している場合は、変換するプロファイルが存在しない。したがって、新しい Sun Java System プロファイルを代わりに作成するように、デスクトップパッケージを設定する)。

手順 3: ユーザーのデスクトップの更新

通常のユーザーとしてターミナルセッションにログオンし、前述の手順 2 で作成したデスクトップインストールパッケージを実行します。これは、ユーザーのプロファイルを変換または作成するだけで、サービスのインストールや更新は一切行いません。次に、Outlook を開き、変換が完了したことを確認します。

ユーザーのデフォルトの電子メールクライアントとして Microsoft Outlook を指定する方法

Sun Java System Connector for Microsoft Outlook は、Microsoft Outlook がデフォルトの電子メールクライアントに設定されているワークステーションでのみインストールできます。Outlook がユーザーのデフォルトの電子メールクライアントとして設定されていない場合、セットアップウィザードでは、このソフトウェアをインストールせず、ユーザーが問題を修正して、もう一度セットアップウィザードを実行します。

Microsoft Outlook をユーザーのデフォルトの電子メールクライアントとして設定するには、次の手順に従います (ユーザーのデスクトップでそのユーザーとしてログインしている場合)。

1. Windows のコントロールパネルを開きます。Windows XP を実行している場合のみ、「クラシック表示に切り替える」を選択します。
2. 「インターネットオプション」をダブルクリックします。
3. 「インターネットのプロパティ」ウィンドウの「プログラム」タブを選択します。
4. 「電子メール」のプルダウンメニューから「Microsoft Outlook」を選択します。
5. 「了解」をクリックします。

ユーザーのワークステーションから Sun ONE Sync プログラムを削除する方法

Connector for Microsoft Outlook の MAPI サービスは、Connector インストールの必須コンポーネントですが、Sun ONE Sync プログラムと共存することができません。Sun ONE Sync がユーザーのワークステーションにインストールされている場合、セットアップウィザードは、この問題をユーザーに通知し (「Welcome」画面の後にエラーメッセージを表示)、確認の上プログラムを終了するように指示します。Sun ONE Sync プログラムが削除された後で、ユーザーはセットアップウィザードを再実行できます。

Sun ONE Sync プログラムをユーザーのワークステーションから削除するには、次の手順に従います (ユーザーのデスクトップでそのユーザーとしてログインしている場合)。

1. 「スタート」メニューから、「プログラム」>「Sun ONE Synchronization」>「Uninstall Sun ONE Synchronization」を選択します。
2. アンインストールウィンドウで、画面の指示に従ってソフトウェアをアンインストールします。
3. 「Finish」をクリックしてアンインストール処理を完了します。

Palm デバイス、WindowsCE デバイス、または Pocket PC デバイスを Outlook と同期させる場合は、Sun ONE Synchronization ソフトウェアを使用するのではなく、それらのデバイスに付属する同期ソフトウェアを使用することを強くお勧めします。デバイスに付属する同期ソフトウェアに変更する場合、Palm Desktop ソフトウェアをアンインストールしてから再インストールする必要がある場合があります。

他のデバイスのデータとの同期に Sun ONE Synchronization ソフトウェアを継続して使用する場合、そのユーザーは Sun ONE Synchronization ソフトウェアを再インストールできますが、Sun ONE Synchronization のインストール時に Microsoft Outlook 98/2000 translator のチェックボックスを選択することはできません。

ユーザーの移行の取り消し (破棄)

新しい Sun Java System サーバーへのユーザーの接続を中止し、そのユーザーのメールボックスを元の Exchange サーバーのサービスに復元するには、次の手順に従います。

1. プロファイル「Xxx (old)」を削除します。
2. 「Xxx Sun」や「Xxx (new)」などの別の名前で、プロファイル「Xxx」のコピーを作成します。
3. プロファイル「Xxx」を削除します。
4. 「Xxx」の名前で、プロファイル「Xxx (Backup)」のコピーを作成します。
5. プロファイル「Xxx (Backup)」を削除します。
6. プロファイルのプロパティを表示して、.pst ファイルの場所を確認します。

.pst ファイルの標準の場所はありません。したがって、このファイルを見つけるには、プロファイル (現在の「Xxx」) を開き、.pst サービスごとに、プロパティをクリックしてパスを調べるしかありません。

7. 各 pst ファイルごとに、Yyy.pst の名前を Yyy.new に変更し、Yyy.bak の名前を Yyy.pst に変更します。
8. プロファイルのプロパティを表示して、.pab ファイルの場所を確認します。

.pab ファイルの標準の場所はありません。したがって、このファイルを見つけるには、プロファイル (現在の「Xxx」) を開き、.pab サービスごとに、プロパティをクリックしてパスを調べるしかありません。

9. 各 pab ファイルごとに、Zzz.pab の名前を Zzz.new に変更し、Zzz.bak の名前を Zzz.pab に変更します。

Yyy.bak ファイルと Zzz.bak ファイルは、同じディレクトリに置かれます。

Sun Java System プロファイルを削除し、システムに置かれた Exchange プロファイルを残すには、手順 2 をスキップします (手順 1 と 3 を合わせる)。

ユーザーが Outlook から LDAP サービスを削除した場合の復元

エンドユーザーが手動で Outlook 2000 から LDAP サービスを削除した場合、削除プロセスで、重要な DLL と設定ファイルが削除および変更され、単に Outlook を修復モードで再インストールしただけでは、「修復」できなくなります。このような場合に LDAP サービスを復元する唯一の方法は、Outlook を完全にアンインストールして、まったく最初から Outlook を再インストールすることです。

索引

E

Exchange メモ、変換, 26

Exchange 履歴、変換, 26

Exchange 連絡先、変換, 26

exe ファイル、デスクトップインストールパッケージ, 21

I

「IMAP」タブ, 31

ini ファイル、デスクトップインストールパッケージ, 13, 20, 21

L

LDAP サービス, 23, 34

「LDAP」タブ, 34

M

Microsoft Web 発行ウィザード, 23

O

Outlook ユーザーパスワード, 28

Outlook ユーザープロファイル、変換, 24, 27

S

「SMTP」タブ, 33

SSL, 31

Sun ONE Sync プログラム、ソフトウェアと互換性がない, 9, 50

あ

空き時間スケジュール, 23

え

エンドユーザー用のソフトウェア, 13, 22

か

「カレンダー」タブ, 35

管理者ソフトウェアのインストール, 8

管理者のソフトウェア, 13

管理者のソフトウェア、インストール, 14, 15
管理者用ソフトウェア, 19

こ

個人用フォルダ (.pst) ファイル, 26, 29
個人用フォルダ (.pst) ファイル、「大きい」と「小さい」, 29
個人用フォルダ (.pst) ファイル、パスワード, 9, 29
この設定に含めるプロセス, 22
このマニュアルで使用する表記上の規則, 10

さ

「サーバー」タブ, 30
サイレントモードのインストール, 22
さまざまなサービスのインストールまたはアップグレード, 22

し

システム要件, 22

せ

設定ウィンドウ (配備設定プログラムの), 19
セットアップウィザード, 13, 23

た

ターミナルサービスユーザー、移行, 9, 48
対話式モードのインストール, 22
タブパネル (設定ウィンドウの), 20
「単一のユーザー」タブ, 36

つ

「ツール」メニュー, 20

て

デスクトップインストールガイド, 14
『デスクトップ配備管理者ガイド』, 11, 14, 22, 23
デフォルトの電子メールクライアント, 9

は

配備計画、作成, 14
配備設定プログラム, 8, 13, 14, 19, 39
配備における管理者の役割, 14
「パッケージを作成」オプション, 20

ふ

「ファイル」メニュー, 20
プッシュ方式のソフトウェア配備, 9, 22, 39
「プロセス」タブ, 21, 42

へ

「ヘルプ」メニュー, 20

ほ

ポート番号、サーバー, 31

ま

マニュアル, [7](#), [17](#)

ゆ

ユーザーインストールプログラムのコマンド行ス
イッチ, [9](#), [47](#)

ユーザーデータの変換, [13](#), [22](#), [24](#), [27](#), [39](#)

ユーザーの移行の取り消し, [9](#)

ユーザーのインストール特権, [9](#), [22](#), [39](#)

ユーザーのインストールパッケージ, [9](#), [13](#), [21](#), [22](#),
[39](#)

ユーザーのインストールパッケージ、以前に保存し
たものを開く, [20](#)

ユーザーのインストールパッケージ、作成, [19](#)

ユーザーのインストールパッケージ、実行, [25](#)

ユーザーのインストールパッケージ、配備, [14](#)

ユーザーのインストールパッケージ、保存, [20](#)

「ユーザープロファイル」タブ, [24](#), [26](#)

「ユーザープロファイルを作成または変換する」,
[24](#), [26](#)

ろ

ログファイル, [24](#)

